山形・生石（おいし）2遺跡

1　所在地　山形県酒田市大字生石字登路田（とろでん）

2　調査期間　二次調査　一九八五年（昭60）七月～九月、三次調査　一九八六年五月～一〇月

3　発掘機関　山形県教育委員会

4　調査担当者　安部　実・伊藤邦弘

5　遺跡の種類　集落跡・官衙跡

6　遺跡の年代　弥生時代前期、奈良～平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

生石2遺跡は、国指定史跡「城輪柵跡」の南東約五kmに位置する。庄内平野の東端、出羽丘陵の山麓にあり、標高一〇～一二mを測る。発掘調査は県営ほ場整備事業施工区に限って行った。調査の結果、板材列に囲われた官衙様建物の配置構成を持つ遺構群が、東西に走る溝（SD三〇〇）を挟んで北側と南側にそれぞれ検出された。北側の板材列の内部から、掘立柱建物一五棟、井戸一基、溝（SD一〇〇）、土壙などが検出されている。

（酒田）

南側の板材列内部から、掘立柱建物六棟、井戸二基、土壙、溝状遺構などが検出されている。墨書土器は、文字の判読不能なものも含めて五二五点出土した。同一墨書銘には「井」（二五七点）、「工」（二二点）などがある。溝SD三〇〇から漆紙文書が一点出土している。

木簡はSD一〇〇の埋土中から出土したもので、他に木材・木製品（弓・曲物・独楽・舟形・鋤・皿など）が多数出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)

・「養養養見（親カ）者有（養カ）□有神是是是是」(a)

・「□□□□」(b)

・「□□□（解申カ）□□□」(c)

・「□□□□□□□」(d)

483×40×19　011

柾目材（杉か）で棒状を呈する。上端は鋭利な刃物で垂直に近く断ち切られている。下端は溝中に存在していた段階で乾燥を受けたものか一部分収縮している。なお先端には斜めに入る削り痕が見られる。四面に墨書・墨痕がある。(a)面の墨書は肉眼でも鮮明に読み

取れる。赤外線テレビを使用した観察によれば、(c)面では二文字のほか墨痕が認められ、(b)・(d)面では墨痕だけで文字は不明であった。(a)面については習書と考えられ、他は不明である。溝という性格上、伴出遺物との年代関係はややあいまいになるが、今のところ奈良末と考えたい。

9 関係文献

山形県教育委員会『生石2遺跡発掘調査報告書（2）』（山形県埋蔵文化財調査報告書第九九集　一九八五年）

同『生石2遺跡発掘調査報告書（3）』（山形県埋蔵文化財調査報告書第一一七集　一九八六年）

（安部　実）